

これから……

田代 和美

この原稿を書いている一九九四年十二月現在、世の中では毎日、子どもたちのいじめの問題が、とりざたされている。いじめを苦に自殺をする子どもたちが相次ぐ中で、私たち大人はこれから何をどうしていこうとしているのだろうか。とりあえずの対症療法もいろいろと提唱されている。そんなことでは問題

は解決はしない。しかし、それをしないと現時点では子どもへの命は救えない。これは非常事態である。数年後に「あの時にも……」、という話に二度となってはならない。「大人になればきつといいことがあるから、子どもたちよ死んではいけない」。今、このようなメッセージも子どもたちに発せられて

いる。子ども時代というのは人が生きていく上での糧をたくわえていくような時間ではなかったのだろうか。子どもたちのためという名目で、大人たちが子どもに対してしてきたことは、一体何だったのだろうか。他人より少しでも早く、他人より少しでも優っていることを目指して、ゆっくり自分で見つけたら、感じたり、考えたり、試したり、話したりする時間や場をどんどん奪って……。子ども時代の子どもの時代たる所以ゆえんを奪うことに、大人は力を注いできたのではないだろうか。子ども時代は生活する世界だけが狭く、そこでの価値観は大人の世界そのままの時代になっってしまったようだ。

いじめ「対策」が、子どもたちだけをターゲットにするのではなく、大人の社会を見据えないことには、子どもたちがなおさら管理

される方向にいかないと限らない。今の社会を見てみれば、子どもや老人など、ハンディを持つ人々にしわ寄せがいつている。それ自体がいじめの構造そのものである。健康な社会ならば、弱い立場の人々がもっともと過ごし易いはずである。そんな大人の世界の病が子どもたちの中に浸透している。大人はそれを自覚しているのだろうか。そして大人の社会の影響はより若い人たちにも影を落としていく。年齢が低いほど生活している世界は狭く、その狭い世界の中でその病は行き場を失い渦を巻く。保育の世界にとってもこれは対岸の火事ではない。

子どもたちにどうやって一人一人の人間が違ふということを、そしてそれぞれが尊い存在であることを実感として分からせるのか。これは人間としてのまさに基本的な部分であ

り、その感覚をなんとなく分からせることが保育の果たす役割であろうと思う。このなるとなくというところが、難しいところであるが、しかし人間としての基本的な部分は理屈ではなく実感として分かることの方が多い。

ある時、幼稚園の先生方と自信の持てない子どもの話をしていた時に、具体的な対応については様々な考えが出され、相当な意見の対立や解釈の違いがあったが、その中で「自身は人間の生き方の基本的な部分は幼児教育でなんとなく分かってほしいなと思って教育している部分があるのね、意識的に」という言葉には皆がうなずいた。そしてまた、「僕がここにいる、私がここにいるっていうことを大々的にアピールできるっていうことは、子どもにとって基本的に大事なことなのよね。自信もへったくれもなく、そこから

始まるのよね」という言葉にも一同がうなずいた。子どもの喜びを自分の喜びとして感じられる感性を持っているからこそ、子どもが喜びを感じることでできる状況が蝕まれていきつつあることを、保育に携わる人々は五感を通して感じている。そして人間として基本的な部分、これを育てていくことを切に願う保育者たちの思いが感じられる。

しかしそういう状況であっても、遊んでいる子どもたちの姿を見ると、子どもたちの楽しみや喜び、そして悲しみや悔しさなどの経験の質は、時代や環境が変わっても変わらないものだと思える。何を疑われない確かな存在感と今を生きている喜びを身体中で示している子どもたちの集団。そして、保育する楽しさを感じている保育者。この両者のかかわりの中で、それぞれの子どもたちの

中に人間として基本的な部分が育っていくの
だろうと思う。子どもたちの本質は変わって
いない。それを保証していけるかどうかは大
人の責任なのである。希望を失っては保育は
営めないし、保育という営みが、未来の健全
な世の中をつくる一端を担っている仕事なの
だという自覚をもちたい。

そして困難に立ち向かいながらも、その大
変さを子どもたちに感じさせることなく、一
緒に楽しむことが求められている。なんだ
か、今の保育者って戦時下の保育者みたいだ
なと時折思うことさえある。先の幼稚園の先
生方との話の中では「『ねばならないと思っ
ている時って、たいてい有効打を打っていな
いじゃない』という話もでた。それも真実で
あろう。子どもたちと共に楽しみながら大人
としての役割と責任を果たすということの難

しさはここにもあるのかもしれない。

本誌が発刊された明治時代から大正・昭和
・平成と時は流れ、冒頭に書いたような現在
にいたり、でも本誌の中で大切にしてきたこ
とは、時代の流れに棹さすことなく脈々と続
いてきた。本誌の昨年四月号に本田和子先生
が書かれているように、本誌の創刊当初にう
たわれた「子どもと共に語り、共に歌い、共
に遊ぶ」ことの意味は、ますます強化・確認
され、普遍的な理念と化している。そして子
どもたちの育つ環境が悪化し、それが、ます
ます必要性を増している。この三月で本田先
生がお茶の水女子大学をやめられ、これから
私が本誌を受け継ぐにあたって、これからも
そのような保育の実現に向けて、保育のこと
を真摯に考え続けている人々と一緒にこの雑

誌を作っていきたいと今、思いを新たにしている。ゆっくり読み、味わいながらゆっくり考えられるような時間と空間を、日々忙しさに追われる大人たちに本誌を通して提供することができるよう、そして、書かれたもの

に対する異論や反論など様々な考えを出し合える、そんな場として本誌が存在することができるようこれから未熟ながらも努めていきたい。

(お茶の水女子大学生生活科学部)

